

[論 文]

成人の高齢者イメージと高齢者の自己イメージの比較

Comparison of the images which adults have toward senior citizens
with the senior citizens' self-images

柴 田 雄 企

Shibata Yuki

ABSTRACT

This study investigated both the differences between the images of senior citizens which adults have and the self-images of senior citizens and also the relationship between the images of senior citizens which adults have and their actual contact experience with the senior citizens. For this purpose, ninety-two adults (between 20 to 57) and twenty-two senior citizens (between 66 to 84) were requested to respond to a questionnaire. The main results were as follows. Firstly, comparing the images of senior citizens which adults have and the self-images of the senior citizens, significant differences were discovered in five items. Two of the items revealed that the images which adults have toward senior citizens were more affirmative than the self-images of the senior citizens: "Senior citizens have rich experience and wisdom." / "You have rich experience and wisdom."; "Senior citizens have assets such as savings and/or property and have an affluent lifestyle." / "You have assets such as savings and/or property and have an affluent lifestyle." The remaining three items revealed that the images of the senior citizens which adults have were more negative than the senior citizens' self-images: "Senior citizens sense a decline in their mental and body health, and they have misgivings about their health." / "You sense a decline in your mental and body health, and you have misgivings about your health."; "Senior citizens are apt to cling to old ways of thinking." / "You are apt to cling to old ways of thinking."; "By volunteering and participating in local activities, they contribute to society." / "By volunteering and participating in local activities, you contribute to society." Secondly, there was little significant correlation between the images of senior citizens which adults have and their actual contact experience with the senior citizens.

キーワード：高齢者イメージ、高齢者の自己イメージ

Key words: image of the elderly, the senior citizens' self-image

【問題と目的】

日本人の平均寿命は2002年の時点で、男性78.3歳、女性85.2歳であり（厚生労働省大臣官房統計情報部、2004）、人生80年時代を迎えている。全人口に占める高齢者数も増加している。

老年期は加齢とともに身体的に衰え、認知機能は衰退し、対人関係は縮小、喪失するなど、生理的・心理的・社会的領域において、さまざまな喪失を経験する時期と言われている。しかし、老年期は身体機能や性格において個人差が大きくなるとも言われており、矍鑠とした元気な高齢者も増えているように思われる。

このような社会状況の中で現代日本人は高齢者に対して、どのようなイメージを抱いているのだろうか。古谷野（1993）は、人々の老人観は、その社会で老人がおかれている状況を反映すると同時にそれを規定し、さらに老人自身の自己概念や適応にも大きな影響を及ぼすと述べている。

高齢者イメージや老人イメージについての研究はこれまでに多くなされてきている。大学生を対象とした研究が多く、保坂ら（1986、1988）は大学生の老人イメージの規定要因として、老人への関心や祖父母との接触など個人の経験に基づく要因の重要性を指摘している。また、滝川ら（1999）は「老年看護学概論」の授業前後での看護学生の高齢者イメージの変化を調査したところ、授業前に比べ、授業後は高齢者イメージが全体的に肯定的方向に変化していたと報告している。

中高年者の高齢者イメージについての研究は少ないが、古谷野ら（1997）は中高年の老人イメージを測定し、「中高年齢者の老人イメージは、全体として中立的で、中立点よりわずかに肯定的な方向に偏って」おり、先行研究における大学生の老人イメージより肯定的であったと報告している。

このように高齢者イメージの研究はこれまで様々な年代の者を対象に、様々な側面から行なわれているが、高齢者イメージを高齢者の抱いている自己イメージと比較したものはみられない。そこで、本研究では、20代から50代までの人々が捉えている高齢者イメージを世代ごとに比較するとともに、65歳以上の高齢者にも同様のアンケート調査を行い、その結果を比較することにした。世代によって高齢者イメージは異なり、年齢が上がるほど、高齢者の生活により近いイメージを持っているのではないだろうか。また、20代から50代までの人々が捉えている高齢者イメージには、祖父母と暮らした経験や、老人ホームに行ったことがあるなどの高齢者との接触体験も影響していると考えられる。そこで、本研究では高齢者との接触経験と高齢者イメージとの関連についても検討する。

【方法】

1. 対象者

大分県内の20～50歳代の男女92名（女性63名、男性29名）と65歳以上の高齢者22名（女性12名、男性10名、平均年齢74.7歳）を分析対象とした（表1）。

表1 本研究の対象者

	年齢幅	平均年齢	男性	女性	計
20 代	20-26	22.0	14	13	27
30 代	30-39	35.5	6	20	26
40 代	40-49	45.1	4	17	21
50 代	50-57	52.5	6	12	18
高齢者	66-84	74.7	10	12	22

2. 調査時期：2006年11月～12月。

3. 質問紙の内容

以下の(1)～(3)のうち、20～50代の対象者には(1)～(3)について回答を求めた。65歳以上の対象者には(1)、(2)について評定を求めた。65歳以上の対象者には(2)については、自分にどれくらいあてはまるかを尋ねた。

(1)基本属性

年齢、性別。

(2)成人の高齢者イメージと高齢者の自己イメージ

表2に示した項目①～⑧の8項目のそれぞれについて5段階評定（「あてはまると思う(5)」「ややあてはまると思う(4)」「どちらともいえない(3)」「ややあてはまらないと思う(2)」「あてはまらないと思う(1)」）を求めた。これらの項目は内閣府「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」（平成16年1月）で用いられたものから抜粋した。

(3)高齢者との接触経験

表3に示した項目①～⑨の9項目について、当てはまるものに○(1)を、当てはまらないものに×(0)をそれぞれつけてもらった。

【結果】

1. 20代～50代の高齢者イメージの比較および高齢者の調査結果との比較

成人（20代、30代、40代、50代）の高齢者イメージと高齢者（65歳以上）の自己イメージを比較するため、また、高齢者イメージを世代別に比較するため、1要因の分散分析を行ったところ、6項目で有意差がみられた（表2）。また、多重比較（Tukey法）の結果、5項目で有意差が認められた（表2）。

①「心身が衰え、健康面での不安が大きい」（ $F(4,109) = 4.28, p < .01$ ）において、40代、50代の者と65歳以上の高齢者との間でそれぞれ有意差が見られた。40代、50代の者は実際の高齢者の自己イメージよりも、高齢者は健康面での不安が大きいと捉えていた。

また、②「経験や知恵が豊かである」（ $F(4,109) = 7.45, p < .001$ ）では、高齢者の意識は「どちらともいえない」に近かったのに対し、成人（20代、30代、40代、50代）は、高齢者は経験や知恵が豊かであると捉えていた。

⑤「古い考え方にとらわれがちである」（ $F(4,109) = 5.23, p < .01$ ）では、20代、40

代、50代の者は高齢者が古い考え方にとらわれがちであると捉えていた。

⑦「ボランティアや地域の活動で、社会に貢献している」(F(4,109)=4.85, p<.01)では、20代～50代の世代のそれぞれと高齢者の自己イメージとの間に有意差がみられた。高齢者自身は社会に貢献していると考えているのに対して、他の世代の者は“どちらともいえない”に近い値を示していた。

⑧「貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある」(F(4,109)=2.64, p<.05)では、40代の者は、高齢者の自己イメージよりも、高齢者は経済的にゆとりがあるというイメージを抱いていた。

表2 成人(20代、30代、40代、50代)の高齢者イメージと高齢者の自己イメージの比較

項 目	20代 (n=27)	30代 (n=26)	40代 (n=21)	50代 (n=18)	高齢者 (n=22)	F 値	多重比較 (Tukey法)
①心身が衰え、健康面での不安が大きい	3.85 (1.20)	3.69 (1.29)	4.38 (0.81)	4.50 (0.62)	3.27 (1.35)	4.28**	40代>高* 50代>高**
②経験や知恵が豊かである	4.07 (1.03)	3.96 (1.11)	4.33 (0.86)	3.83 (1.20)	2.82 (0.73)	7.45***	20代>高*** 30代>高*** 40代>高*** 50代>高*
③収入が少なく、経済的な不安が大きい	3.11 (1.16)	3.15 (0.97)	3.14 (1.06)	3.06 (1.06)	3.27 (1.49)	0.10	n.s.
④時間にしばられず、好きなことに取り組める	3.41 (1.12)	3.38 (1.02)	4.00 (0.71)	3.67 (0.77)	4.09 (1.07)	2.67*	n.s.
⑤古い考え方にとらわれがちである	3.81 (0.96)	3.19 (1.10)	3.81 (0.75)	3.78 (0.88)	2.77 (1.11)	5.23**	20代>高** 40代>高** 50代>高*
⑥健康的な生活習慣を実践している	3.22 (1.12)	3.38 (1.06)	3.29 (0.85)	3.11 (1.08)	3.82 (0.96)	1.52	n.s.
⑦ボランティアや地域の活動で貢献している	2.63 (1.12)	2.81 (1.13)	2.90 (0.94)	2.89 (0.90)	3.82 (0.85)	4.85**	20代>高** 30代>高** 40代>高* 50代>高*
⑧貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある	2.74 (0.86)	2.92 (0.94)	3.19 (0.68)	2.89 (1.02)	2.23 (1.48)	2.64*	40代>高*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001
()内はSD

2. 高齢者との接触体験と高齢者イメージ

20歳代から50歳代の成人の高齢者との接触経験を表3に示した。表3の項目①～⑤までの直接的な高齢者との接触経験については、年代による差はあまりみられないようであった。表3の項目⑥～⑨の間接的な高齢者との接触経験については、年代が高いほど高齢者との接触経験が多いようであった。

表3 高齢者と接した経験（あてはまると回答した者の割合（%））

項 目	20代 (n=27)	30代 (n=26)	40代 (n=21)	50代 (n=18)
①老人ホームに行ったことがある	48.1	52.0	47.6	50.0
②祖母と暮らしている。または、これまでに暮らしたことがある	37.0	54.0	47.6	55.6
③祖父と暮らしている。または、これまでに暮らしたことがある	33.0	42.3	38.1	61.1
④これまでに高齢者と関わるボランティアをしたことがある	40.7	19.2	23.8	27.8
⑤祖父母以外の高齢者と交流したことがある	63.0	69.2	76.2	72.2
⑥高齢者に関する話題をテレビで見たことがある	88.9	96.2	100.0	100.0
⑦高齢者に関する話題をラジオで聞いたことがある	18.5	46.2	42.9	33.3
⑧高齢者に関する話題を新聞、または雑誌で読んだことがある	55.6	92.3	95.2	100.0
⑨高齢者に関する話題を小説、または映画で見たことがある	26.0	46.2	61.9	55.6

成人における、高齢者との接触体験と高齢者イメージとの関係を検討するため、高齢者との接触体験についての9項目と、高齢者イメージの8項目との相関係数を求めた。その結果、「健康的な生活習慣を実践している」と「高齢者に関する話題をテレビで見たことがある」との間に有意な正の相関がみられた ($r=.30, p<.01$)。また、「貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある」と、「祖母と暮らしている。または、これまでに暮らしたことがある」 ($r=.36, p<.01$) および「祖父と暮らしている。または、暮らしたことがある」 ($r=.22, p<.05$) との間にそれぞれ有意な正の相関がみられた。

【考察】

1. 高齢者イメージの世代別比較

世代によって高齢者イメージが異なり、年代が上がるほど高齢者の生活により近いイメージを持っているのではないかと筆者は考えていた。しかし、成人の高齢者イメージにおける世代差はみられなかった。

成人の高齢者イメージと高齢者の自己イメージの間には5つの項目で有意差がみられた。①「心身が衰え、健康面での不安が大きい」で有意差がみられたのは、40代、50代の者が老年期を前にして、自身の健康面での不安を意識しているからかもしれない。②「経験や知恵が豊かである」で有意差がみられたのは、高齢者の謙虚さの現われか、経験や知恵を身につけた高齢者になりたいという成人の願望が回答に影響したためかもしれない。⑤「古い考え方にとらわれがちである」、⑦「ボランティアや地域の活動で社会に貢献している」、⑧「貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある」でも有意差がみられ、成人と高齢者の意識の違いがあらわれたと考えられる。

有意差のみられた5項目のうち、成人の高齢者イメージが高齢者の自己イメージより否定的だったのは①、⑤、⑦であった。これらの結果から、成人の高齢者イメージと高齢者の自己イメージとの間で差異があり、問題になってくるのは健康面での不安、古い考え方へのとらわれ、社会への貢献についての認識ではないかと考えられる。これまでの高齢者イメージについての研究では、実際の高齢者の自己イメージとの比較がなされていなかったが、本研究では成人と高齢者との間で、意識に差異のある側面が、一部ではあると思われるが、浮き彫りにされたと言えよう。

本研究のイメージ評定で用いた項目は、内閣府が行った「年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査」で用いられたものである。この調査では「あなたは「高齢者」「お年寄り」というと、どのようなイメージを持っていますが、以下の文章の中から特にあてはまると思うものを3つまでお答え下さい」という尋ね方をしていた。よって、本研究の質問の仕方とは異なるため、結果を単純に比較することはできないが、同様の結果が得られているように思われる。すなわち、内閣府の調査結果では、「心身がおとろえ、健康面での不安が大きい」が72.3%と最も多く、次いで、「経験や知恵が豊かである」が43.5%、「収入が少なく、経済的な不安が大きい」が33.0%、「時間にしばられず、好きなことに取り組める」が29.9%と、健康面・経済面において否定的に、知識や考え方の面や日常生活面において肯定的にとらえている傾向が見られた。また、「ボランティアや地域の活動で、社会に貢献している」は7.7%であり、社会貢献面から高齢者をイメージする傾向はあま

り見られないという結果であった。

内閣府の調査で多く選択された、「心身がおとろえ、健康面での不安が大きい」、「経験や知恵が豊かである」の2項目については、本研究の結果でも、“ややあてはまる”に近い評定値であった。

2. 高齢者との接触体験と高齢者イメージ

筆者は、20代から50代までの人々の高齢者イメージには、祖父母と同居した経験や、老人ホームに行ったことがあるなどの高齢者との接触体験が影響しているのではないかと予測していた。しかし、結果は、高齢者との接触体験は高齢者イメージとあまり関連していないというものであった。

高齢者との接触経験と高齢者イメージとの間にほとんど相関がみられなかったのは、高齢者との接触経験の有無について尋ねた項目が量的で、表面的なものだったためと思われる。高齢者との質的な接触経験を引き出せるような項目であれば、何らかの関連がみられたかもしれない。

あるいは、高齢者との接触経験と高齢者イメージの間には、実際にあまり関連がないのかもしれない。関連がない場合、成人の高齢者イメージは高齢者との接触経験によってはほとんど変化しないと考えられる。

有意な相関が見られたのは「健康的な生活習慣を実践している」と「高齢者に関する話題をテレビで見たことがある」、「貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある」と「祖母と暮らしている。または、これまでに暮らしたことがある」および「祖父と暮らしている。または、これまでに暮らしたことがある」であった。これは高齢者が健康的な生活習慣を実践しているといったようなテレビ番組を見たことがある者が調査対象者の中に存在していたためではないかと思われる。また、祖父母との同居経験のある者が、高齢者には経済的ゆとりがあるというイメージを抱いていたが、これは孫としての自分に祖父母が何かを買い与えてくれたり、小遣いをもらったりした経験の記憶が影響したのではないかと考えられる。

【引用文献】

- 保坂久美子・袖井孝子 1986 大学生の老人観 老年社会科学, 8, 103-116
保坂久美子・袖井孝子 1988 大学生の老人イメージ—SD法による分析— 社会老年学, 27, 22-33
厚生労働省大臣官房統計情報部 2004 平成16年 我が国の人口動態 平成14年までの動向, 財団法人 厚生統計協会, p33
古谷野亘 1993 老いに対する態度 (柴田 博・芳賀 博・長田久雄・古谷野亘編) 老年学入門: 学際的アプローチ, pp177-184 川島書店
古谷野亘・児玉好信・安東孝敏・浅川達人 1997 中高年の老人イメージ—SD法による測定— 老年社会科学, 18 (2), 147-152
内閣府 2004 年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査
柴田雄企 2004 短期大学女子学生の痴呆性高齢者イメージと高齢者イメージ 大分県立

芸術文化短期大学研究紀要, 42, 59-66
滝川由美子・吉本知恵・横川絹恵 1999 看護学生の高齢者イメージの変化ー老年看護学
概論の授業前・後の比較 香川県立医療短期大学紀要, 1, 51-60

付記

本研究の調査にご協力いただきました皆様に深謝いたします。データの収集にあたっては林亜樹さんと山崎樹里さん（大分県立芸術文化短期大学2006年度卒業）にご協力をいただきました。記して感謝致します。